

<b>Title</b>	福沢諭吉の初の朝鮮人留学生受入れに関する一考案：『学問のすゝめ』 『文明論之概略』との関連において
<b>Author</b>	岡本, 洋之
<b>Citation</b>	教育学論集. 14 卷, p.35-49.
<b>Issue Date</b>	1988-05
<b>ISSN</b>	0288-4909
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科教育学教室
<b>Description</b>	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

# 福沢諭吉の初の朝鮮人留学生受入れに関する一考察

— 『学問のすゝめ』『文明論之概略』との関連において —

岡本洋之

## はじめに

福沢諭吉(1834~1901)が、日本教育史を語る上に欠くべからざる人物であることは論を待たないところであり、これまで福沢の教育論に関しては実に多くの研究著書が出されている。また彼は同時に、日清戦争の前後の時期に、朝鮮に深くかかわった人物でもあり、自らの主宰する新聞『時事新報』に数多くの朝鮮論を著している。これについても、日本近代史や政治学などの方面からたくさんの研究がなされてきた。

しかし、教育と朝鮮の接点とも言うべき、朝鮮からの留学生受入れに関しては、彼がこれを行なった最初の日本人とされているにもかかわらず、未解明の部分が数多く残されているのが現状である。

そのような中で、これまでアジア人の日本留学史に関する資料の発掘を行ってきた阿部洋は、1881(明治14)年に3名の朝鮮人が初めて日本に留学してからのち、日韓併合までに、朝鮮人留学生の来日には3つのピークがあったと指摘している<sup>(1)</sup>。

第1のピークは、1883(明治16)年、後に独立協会の創立メンバーの一人となって朝鮮の歴史上の人物となった徐載弼(1864~1951)をはじめとして、約60名が来日したものである。

第2のピークは、日清戦争を機とした日本の朝鮮における勢力拡大を背景に行なわれた1894(明治27)年の甲午改革の時期に、200人近い朝鮮人留学生が「朝鮮政府依託留学生」として来日したものである。

そして第3のピークは、日露戦争に日本が勝利した後の、1904(明治37)年末における「韓国皇室特派留学生」50名の来日を皮切りに、日韓併合前後には500名を超えるに至るまで増加したものである。

このうち、初の留学生受入れ、及び「第1のピーク」「第2のピーク」の、計3回に関しては、いずれも福沢が大きく関与し、何らかの形で慶応義塾が受入れを担っている。

本論文は、これらのうち、初の留学生受入れに関して現在知りうる事実と、福沢の文明論・朝鮮論とのかかわりを中心に論述した。それは、彼の論説に表された考え方が、現実にどのような行為となって現れたのかを明らかにしたかったからである。

今回とりあげた時期だけをとってみても、福沢の朝鮮論はめまぐるしく変化しているように見える。初めは「朝鮮を相手にすべきでない」と主張していたのに、やがて「進歩を脅迫してでも朝鮮を文明に入れよ」と説く。そのような彼の論説の中に一貫したものを見出すためには、論説そのものの分析を、彼の具

体的な行動の分析と結びつけて行なわねばならないであろう。すなわち、それぞれの朝鮮論も、彼の朝鮮に対する具体的なかかわりの内容と関連してとらえられてはじめて、十分に意味が解明されると思うのである。

そのようなことを考えながら、本論文の展開を進めていくと、どうしても、福沢の思想への全般的な評価に関係したところまで、ある程度は踏み込まざるを得なくなってくる。ことに今回取り上げた、福沢が朝鮮にかかわり始める時期は、丸山真男が、福沢の思想が大きく変化していく時期だと指摘したところでもあり、福沢への評価についてはたびたび論点とされてきたところである。

そこで本論文では、福沢の朝鮮、そして留学生へのかかわりから、彼が、日本と朝鮮のそれぞれがどのように「文明化」していくことを望んでいたのかを見、それを踏まえて丸山説を検討する中で、さらに『学問のすゝめ』『文明論之概略』に見られる福沢の文明論と、しだいに強硬になっていく彼の朝鮮論との連続性について考察を行なった。

#### 〈注〉

- (1) 本論文中に取り上げた時期には、朝鮮では太陰暦を用いていたが、文中に記した年月は、特に断りのない限り、太陽暦に換算したものである。
- (2) 朝鮮のことを一文字で表現する必要があるときには、引用のままに記した箇所以外はすべて「朝」の字を用いた。  
(例) 日朝修好条規

### I 初の留学生受入れ前後の福沢の朝鮮論の推移

#### 1. 「日本は朝鮮を相手にすべきでない」とする福沢

福沢諭吉が初めて朝鮮開化派の人物と出会ったのは、1880(明治13)年であるが、それ以前の時期には彼は朝鮮についてどのように考えていたのだろうか。

この時期に福沢の書いた朝鮮論はわずかである。その中に、1875(明治8)年10月7日付『郵便報知新聞』社説欄に掲載された「亞細亞諸国との和戦は我榮辱に関するなきの説」がある。これは、征韓論をめぐって新聞紙上でさかんに議論が行なわれていた当時、福沢が征韓論への反対を表明したものである。

この中で福沢は、朝鮮について、「抑も此國を如何なるものぞと尋るに、亞細亞洲中の一小野蠻國にし

て、其文明の有様は我日本に及ばざること遠しと云ふ可し。之と貿易して利あるに非ず、之と通信して益あるに非ず、其學問取るに足らず、其兵力恐るゝに足らず、加之假令ひ彼より來朝して我屬國と爲るも、尚且之を悦ぶに足らず<sup>(2)</sup>と述べ、朝鮮を、国交をもつても日本には何の利益もない、取るに足りない「一小野蠻國」<sup>(3)</sup>と断定している。

しかし、福沢の論旨の中でヨリ注目すべきは、このあとに続く部分であろう。「蓋し其故は何ぞや。前に云へる如く我日本は歐米諸國に對して竝立の權を取り、歐米諸國を制するの勢を得るに非ざれば、眞の獨立と云ふ可らず。而して朝鮮の交際は假令我望む所の如くなるも、此獨立の權勢に就き一毫の力をも増すに足らざればなり。……之〔朝鮮のこと……引用者注、以下同じ〕に勝て榮とするに足らず、之を取て利するに足らず。巨萬の軍用金を費して歐米の物を仰ぎ、歐米の軍艦を買ひ、歐米の銃砲を求め、錢を歐米の人に與へて物を朝鮮の國に費し、結局我外債の高を増して、毎年海に投ずるに等しく償金を拂ふに等しき利足を外國に輸出するに過ぎず<sup>(4)</sup>」。福沢はこう述べて、朝鮮と戦争をすることは、日本の国力を消耗させ、その結果、歐米諸國への經濟的依存を強めることになるから、列強の圧迫の中で日本が獨立を保持するのに何の利益にもならないどころか、かえって獨立をゆるがすことになるとし、征韓論に反対するのである。

以上より、福沢は、列強の圧迫の中で日本の獨立を保持することを第一とし、そのために日本は朝鮮との關係をどうしていくべきか、という視点で朝鮮論を展開していることがわかる<sup>(5)</sup>。

そしてその視点から考えた結果、この段階では、日本の獨立保持のためには、日本は朝鮮をいわば「相手にすべきでない」という結論に、福沢は到達したのである。

## 2. 日本の対朝鮮政策を考え始める福沢

### 1) 朝鮮開化派の形成

一方、朝鮮には、留学生を送り出すまでにどのような経緯があったのであろうか。

朝鮮はもともと鎖國状態にあったが、19世紀後半になると、西洋列強諸國が日本に對すると同じく通商を要求し、やがて武力を用いて朝鮮に開國を迫るようになった。1866年にはアメリカの武装商船シャーマン号が朝鮮北部の大同江を遡上、交戦のすえ平壤付近で焼き沈められる事件が起きた。また同年、朝鮮国内でフランス人宣教師9名が処刑されたことからフランス艦隊が出動したが、朝鮮側は持久戦の末これを撃退した（以上2事件を丙寅洋擾と呼ぶ）。次いで1871年、アメリカはさきのシャーマン号事件の責任追及を掲げて艦隊を派遣、朝鮮側は交戦で打撃を被ったものの、交渉を拒否して艦隊を追い返した（辛未洋擾）。

これら一連の事件は、大院君（1820～98）政權の攘夷鎖國政策のもとで起こった。この政策を支える思想は、歐米は「邪」であり貨色に溺れ人倫を欠いた禽獸の地であるので、歐米を撃退することによって、

「正」である朝鮮を衛らねばならないというもので、「衛正斥邪思想」と呼ばれる。これによれば、明治維新以後欧米文明の摂取に努める日本も「邪」である（「倭洋一体」）。衛正斥邪思想及びそれに基づいた攘夷鎖国政策は、米仏を撃退したことで、いよいよ強固になった。

しかし、シャーマン号焼打ちの指揮に当たった朴珪寿（1807～77）は、かつて清国に派遣された折に、西洋列強の動向と実態をつぶさに見ていたので、攘夷鎖国政策では朝鮮の独立を守れないことを悟っており、71年の辛未洋擾以後は朝鮮の自主的開国を主張して攘夷鎖国政策に反対し、書契問題<sup>(6)</sup>で紛糾していた日本との国交も回復させよと唱えた。74年に隠退した後は、自宅で両班（文武の官僚に任ぜられた特権階級）の子弟たちに外国情勢などを語って聞かせた。朴珪寿の門下である金玉均（1851～94）・朴泳孝（1861～1939）・金允植（1841～1920）・兪吉濬（1856～1914）らをはじめとする、朝鮮の近代的改革をめざす人々は、「開化派」と呼ばれた。

そして、この開化派の中には二つの潮流があった。金玉均・朴泳孝らは、変法的（急進的）開化派と呼ばれ、清国との伝統的な宗属関係をなくして朝鮮を完全な独立国家にすべきだと考え、そのために、短期間で欧米文明の摂取に成果を上げた日本をモデルにして朝鮮の近代化を実現しようとした。一方、金允植・兪吉濬らは、改良的（穏健的）開化派と呼ばれ、清国との宗属関係に固執する衛正斥邪派と妥協しながら、清国の洋務運動をモデルとして朝鮮の近代化に向けた漸進的改良を図ろうとした。但しまだこの段階では、両者間には亀裂はなく、ともに朝鮮の近代化をめざすことで一致していた<sup>(7)</sup>。

## 2) 福沢の朝鮮「文明化」への始動

やがて1875（明治8）年、江華島事件が起こり、翌76（明治9）年には日朝修好条規が締結されて、朝鮮は他律的に開国をすることとなった。朝鮮開国に伴い日本仏教界では真宗東派（現・大谷派）が奥村円心（1843～1913）を朝鮮に派遣して布教を開始する。これは、廃仏毀釈の打撃を受けた仏教界が、自らを再建しようとした運動の現われのひとつであろう。1878（明治11）年には奥村によって東本願寺釜山別院が設けられた<sup>(8)</sup>。

この動きを受けて、変法的開化派の一人である僧侶の李東仁（？～1881）は、世界や日本の動向を知ろうとして奥村に接近し、やがて金玉均らの委嘱を受け、世界情勢の把握と日本の国情視察のため、奥村の助けを受けて、1879（明治12）年に密航して来日する<sup>(9)</sup>。

李東仁は、奥村の紹介を受けた京都の東本願寺に滞在したあと、翌1880（明治13）年、東京の東本願寺浅草別院（現・東京本願寺）に移り、この東京滞在中に、大坂慶応義塾（1873＝明治6年に大阪に創設された慶応義塾の分校。1875＝明治8年閉校）の出身で福沢のもとに出入りしていた真宗東派の学僧寺田福壽<sup>00</sup>の紹介で、福沢論吉と会うことになる。石河幹明は著書『福沢論吉伝』の中で、これについて、「當時先生〔福沢のこと〕の家に居た寺田福壽（東本願寺派の僧侶）に依って先生に面會し、日本名を朝野某と稱して、しばしば先生の門に出入してみた<sup>00</sup>」と記している。

一方、朝鮮政府は、日本の圧力で開国はしたが、日朝修好条規が朝鮮にとって不利な不平等条約であった上に、衛正斥邪派の勢力も強かったため、日本に条約改正を働きかける必要があった。そこで、①仁川の開港延期・公使駐在の撤回、②関税自主権の回復、③日本の朝米条約締結勧告への婉曲な拒否、④日本の国情視察を目的として、同年8月に、改良的開化派官僚の金弘集（1842～96）を日本に派遣した。<sup>02</sup>

福沢は、李東仁に関しても、また金弘集に関しても、まとまった内容を含むことがらは、文章にも書簡にも全く記していない。しかしこのころの福沢には、前節で述べたような、朝鮮を、いわば「相手にしない」態度とは明らかに違ったものが見られる。すなわち彼は、福沢家の家庭教師をしながら慶応義塾に学んでいた井上角五郎（1860～1938）を使って、後藤象二郎（1838～97）<sup>03</sup>との間で「我國の朝鮮に対する手段方法に就いて」<sup>04</sup>頻りに話し合っていたのである。その詳しい内容については「秘密」として井上もこれを語らないが、日本の対朝鮮政策のあり方を、福沢が詳細に考え始めたことは間違いない。

そして、前後の彼の朝鮮論と合わせて見るならばこの時期は、これまでの、朝鮮を「相手にしない」態度から、朝鮮の「改造」を叫ぶ態度への、ちょうど過渡期に当たっていると言えよう。

### 3. 日本の脅迫による朝鮮「文明化」を説く福沢

#### 1) 紳士遊覧団の来日と初の留学生受入れ

さて、金弘集は、自らの任務を何一つ果たせないままであったが、東京で李東仁に会い、大いに驚いた。しかし李東仁が日本語を巧みに話すことや、国際情勢に明るいことから、金弘集は自らに続いて彼を帰国させた。帰国後、李東仁は開化派官僚だけでなく国王高宗（1852～1919）の寵愛をも受け、やがて李東仁の働きかけによって、朝鮮政府の使節団が、日本の開化政策の実情調査のために派遣される。これは普通、「紳士遊覧団」と呼ばれている。<sup>05</sup>

一行は使節（全員が両班出身）12名を中心とする総勢62名で、翌1881（明治14）年5月から日本の内務省・農商務省・外務省などの各省や、陸軍・税関などを視察するかたわら、政府要人や福沢諭吉と会談した。この使節のひとりで、改良的開化派であった魚允中（1848～96）は、大蔵省を中心に視察する一方、自らの随員として同行していた兪吉濬（前述）と柳定秀（生没年不詳）の2名を福沢に預けた。この2名が、福沢の受け入れた最初の外国人留学生である。また同時に、同じく紳士遊覧団の随員であった尹致昊（1865～1945）も、中村正直の同人社に入学している。<sup>06</sup>

福沢はこの2名の入社について、同年6月17日に、ロンドン滞在中の門下生、小泉信吉・日原昌造に宛てた書簡の中で、塾の近況の一部として次のように記している。「本月初旬朝鮮人数名日本の事情視察の爲渡來、其中壯年二名本塾へ入社いたし、二名共先づ拙宅にさし置、やさしく誘導致し遣居候。誠に二十餘年前自分の事を思へば同情相憐むの念なきを得ず、朝鮮人が外國留學の頭初、本塾も亦外人を入るゝの發端、實に奇偶〔遇〕と可申、右を御縁として朝鮮人は貴賤となく毎度拙宅へ來訪、其咄を聞けば、他な

し、三十年前の日本なり。何卒今後は良く附合開らせる様に致度事に御座候<sup>18</sup>」。

この書簡で福沢は、留学生の入社を20余年前の自分の姿と重ね合わせて、彼らに同情を示している。また、紳士遊覧団員から聞いた朝鮮の国情を、30年前の日本と重ね合わせている。ここで福沢は、「良く附合〔つきあい〕開らせる様に致度事に御座候」と言っており、これは、朝鮮の文明開化を日本が指導していくべきこと、そして自分がその指導の中で一定の役割を占めたいと考えていることを表しているものと読み取れよう。

## 2) 朝鮮への平和的働きかけを乗り越えて脅迫による朝鮮「文明化」論へ

### — 「時事小言」を中心に —

ところが福沢は、決して平和のうちに朝鮮に「文明化」を働きかけようとしていたのではない。彼は、前節で述べた、「日本の独立の保持」を至上課題としてうち出し、そのために朝鮮との関係をどうすべきかという視点での論調を、ますます強化していく。そして、当時の朝鮮国内において日本に対する反発が強くなるにつれて、福沢の朝鮮論は、朝鮮への平和的働きかけを越えて、武力を伴う朝鮮改造論になっていったのである。これらのことを鮮明に打ち出した『時事小言』を彼が書いた時期は、前述の留学生受入れの時期と見事に一致している<sup>19</sup>。

『時事小言』は、緒言と本文6編から成る。まず緒言において福沢は、民権論の盛んな風潮に対し、今は国の独立が危機であり、これを守ることができなければ、民権伸暢も無意味であると戒める。

その上で国権について、第四編「國權之事」で詳しく展開している。ここで朝鮮・清国などアジア諸国と日本との関係についても言及している。

まず福沢は、前提として「外國交際の大本は腕力に在りと決定す可きなり<sup>20</sup>」と述べ、軍備を大幅に拡張することによって、日本を西洋の列強諸国に侮られぬようにすべきだ、さもないと「兵力強からざるときは今の富を保護すること甚だ難きのみならず、或は之を失ふに至る可し<sup>21</sup>」と主張する。

そして彼は、列強は、たとえ弱くとも同じ西洋の国を圧迫することはないのに、東洋諸国にたいしてなら圧迫をかけてくるのは、東洋諸国が西洋諸国にとって「異類」だからである、と述べ、アジアの先頭に立って西洋列強に当たるのは、同じ東洋の中の日本以外にはない、とする。

ここで彼は、西洋の侵略を火災の蔓延に、アジアの現状を粗末な木造家屋の並んだ様子にたとえる。アジアの中で日本だけが自らを石造りとし、自国の独立を保持しようとしても、まだ隣家が木造である以上、全く安心できない。隣家をも石造りにせねば日本の独立は保持できないのであるから、「事情切迫に及ぶときは、無遠慮に其地面を押領して、我手を以て新築するも可なり<sup>22</sup>」「武以て之を保護し、文以て之を誘導し、速に我例に倣て近時の文明に入らしめざる可らず。或は止むを得ざる場合に於ては、力を以て其進歩を脅迫するも可なり<sup>23</sup>」という論理を展開するのである。

以上からわかるように、福沢は、「日本の独立を保持する」という至上課題の遂行のためには、武力を

用いてでも隣国を「改築」せねばならないことを強調している。当時日本が福沢の言う「改築」を行なうことの可能だった隣国は朝鮮のみであったことから、ここで言う「隣家」は朝鮮のことと考えられる。

当初、朝鮮を「相手にすべきでない」としていた福沢が、このように強硬な朝鮮「文明化」論を説くまでになったのはなぜであろうか。それを明らかにするために、ここで、当時の内外の政治状況を3点指摘しておきたい。

第1に、日本国内では、この前年の1880（明治13）年に国会期成同盟会が結成され、自由民権運動はこの時期に非常に盛り上がっていた。

第2に、坂野潤治が指摘するところによれば、当時、清国が朝鮮の宗主国をもって任じていたことから、日本が朝鮮を「近時の文明に入」れようとすれば、清国 — それは列強の侵略にさらされているとはいっても、軍事大国であるには違いない — と日本との関係の悪化を招くことになる。<sup>24</sup> しかも仁川開港交渉などで日本が朝鮮に圧力を加えれば加えるほど、朝鮮では反日感情が強まったため、「親清」と見られた大院君ら衛正斥邪派が力を増大させる一方、福沢が朝鮮の「文明化」を直接指導する相手と考えている。

「親日」と見られた金玉均ら変法的開化派は弱くなるという傾向が、1881（明治14）年初め以来ますます顕著になっていった。<sup>25</sup>

第3に、坂野の指摘によると、当時、日本の独立が脅かされるほど切迫した列強の軍事行動はなかった<sup>26</sup>。

以上の諸点から、次のように考えられる。自由民権運動の盛り上がりは、福沢にとっては国内を乱す危険なものであり、何としてもこれを抑えて内政の安定を実現せねばならなかった。一方、目を国外に転ずれば、朝鮮では「親日」と見られた勢力が後退しつつあった。それを見た福沢は、まず、具体的根拠が乏しいにもかかわらず、日本の独立が今まさに危機にさらされているからこれを保持せねばならない、という「至上課題」を叫ぶ。そして、この課題を遂行するためには、清国との対立を覚悟の上で、場合によっては武力を用いてでも朝鮮を清国の傘下から切り離し、日本の「指導」により「近時の文明に入」れよと提唱する。こうして福沢は、国民の目を朝鮮へ向けさせ、「官民調和」を図って内政の安定を実現しようとしたのであろう。

だから、以前のように、福沢は朝鮮を「相手にしない」姿勢はもはやとれなかった。それどころか彼は、「隣国の近代化推進者を支援するという民間思想家として何ら恥ることのない課題を乗り越えて、日本政府に、武力行使を含めた朝鮮内政改革派の援助を要求するという点にまで、『時事小言』を書いた時点で追い込まれていた<sup>27</sup>」のである。そうであるからこそ、彼は、「無遠慮に其地面を押領」「力を以て其進歩を脅迫」するもやむをえないという考え方を表明したのである。

この考え方は、翌1882（明治15）年3月9日、福沢が自らの主宰する新聞『時事新報』<sup>28</sup>に載せた社説「朝鮮の交際を論ず」でいっそう具体的な形となって現れる。すなわちアメリカが日本を最初に開国させたのと同じように、日本が朝鮮を最初に開国させたという「行き掛り」がある以上、日本は「其〔朝鮮の〕内國の治亂興廢、文明の改良進歩に就ても、楚越の觀を爲す可き場合に非ず<sup>29</sup>」とする。その上で、日本に



において幕末に攘夷論者が西洋人を襲撃したことからイギリスが自国人の保護のために軍隊を日本に駐屯させたことを取り上げ、これは正当であったとし、日本が今、いつ起こるかもしれない朝鮮の「鎖攘の黨類」の邦人襲撃に備えて軍隊を送るべきであると述べている。さらに彼は、「假令ひ或は自衛の備を要せずとするも、彼の國人心の穩かならざる時に當て、我武威を示してその人心を壓倒し、我日本の國力を以て隣國の文明を助け進るは、兩國交際の行き掛りにして、今日に在ては恰も我日本の責任と云ふ可きものなり<sup>30</sup>」とまで言っている。

右に述べた、清國が朝鮮の宗主國をもつて任じていた当時の状態と、この文を合わせて見れば、福沢の考え方が、朝鮮を清國の傘下から切り離して日本の傘下に入れることを強烈に指向していたことがわかる。

そして、このような彼の朝鮮改造構想の反清國的色彩は、これ以後強くなる一方であり、そのことは、留學生の性格にも如実に反映してくる。

## II 福沢の考えていた朝鮮人留學生の任務と、福沢のナショナリズム

### 1. 福沢の考えていた留學生の任務

#### ——文化面における朝鮮「文明化」の指導——

このように、福沢は、朝鮮を「相手にしない」態度から、一足飛びに、武力によって朝鮮の「文明を助け進る」ことを主張するに至った。ここで、福沢が朝鮮人留學生に対して期待していたものは何なのかを明らかにするために、彼の言う「文明の進歩」について見てみたい。彼は文明の進歩のプロセスを——少なくとも後進國においては——どのように考えていたのだろうか。それを、まず日本の場合について見ることにより、明らかにしたい。

福沢は、1872（明治5）年に、『學問のすゝめ』初編の中で、「人間普通日用に近き實學<sup>31</sup>」として、いろは47文字、手紙の文言、帳合（簿記）の仕方、算盤の稽古、天秤の取扱い等のほか、地理學、究理學（物理學）、歴史、經濟學、修身學をあげ、これらは「人たる者は貴賤上下の區別なく皆悉くたしなむべき心得なれば、此心得ありて後に士農工商各其分を盡し銘々の家業を營み、身も獨立し家も獨立し天下國家も獨立すべきなり<sup>32</sup>」と述べている。また、『文明論之概略』中には、「文明とは人の安樂と品位との進歩を云ふなり。又この人の安樂と品位とを得せしむるものは人の智徳なるが故に、文明とは結局、人の智徳の進歩と云て可なり<sup>33</sup>」とある。これらの言葉に現れているように、福沢は、まず教育によって國民の智力<sup>34</sup>を養い、各人を獨立した個人に育成し、それが國中に行き渡って國の文明化となり、これによって「一國獨立」が達成されると考えた。したがってまず行なわれるべきことは、教育によって國民の智力を高めることであった。

しかし福沢は、ただ全國に學校を設ければ、それだけで國民の智力を一律に引き上げられるとは考えなかった。このことは、1874（明治7）年の『學問のすゝめ』第四編の中で、明治政府の政策がうまく進ま

ないことについて、「其原因とは人民の無知文盲即是なり。政府既に其原因の在る所を知り、頻りに學術を勧め法律を議し商法を立の道を示す等、或は人民に説論し或は自から先例を示し百万其術を盡すと雖ども、今日に至るまで未だ実效の擧るを見ず、政府は依然たる専制の政府、人民は依然たる無氣無力の愚民のみ」と述べること<sup>89</sup>によって、福沢が国民の大半を占める「愚民」の智力増進への絶望に近いものを表明していることからわかる。

それでも福沢は、「我國の文明を進めて其獨立を維持するは、……必ず我輩の任ずる所にして、先づ我より事の端を開き、愚民の先を爲す」と、自らが、いわば国民智力増進運動を起こしてその先頭に立つことを宣言し、具体的には「或は學術を講じ、或は商売に従事し、或は法律を議し、或は書を著し、或は新聞紙を出版する等」の決意を述べる<sup>87</sup>。

この「学問のすゝめ」第四編と同時に出版された第五編では、さらに、一般に文明が生じてくるところは、政府でも下層の人民でもなく、たとえばイギリス資本主義の発展に貢献したワット（蒸気機関の発明者）、スティーヴンソン（蒸気機関車の発明者）、アダム＝スミスなどに代表される「所謂『ミツルカラッス』なる者にて、……正に國人の中等に位し、智力を以て一世を指揮したる者なり」と説明する<sup>88</sup>。ところが、日本の「ミツルカラッス」である学者層は、ひたすら官僚への道を求めるばかりであり、これでは学者層は日本の「文明化」のリーダーにはなれないことを憂える福沢は、ただ慶応義塾の社中で実地の応用を踏まえて学問を修めた者のみが「貧苦を忍び艱難を冒して、其所得の知見を文明の事実に施」さねばならないと述べたのである<sup>89</sup>。

以上より、福沢は、慶応義塾を拠点として、日本の「ミツルカラッス」＝「文明化」のリーダー層＝を養成することによって、義塾の社中ひとりひとりの「一身獨立」を達成し、その氣風を多くの「愚民」の間に浸透させることで、日本の「一国獨立」を図ろうとしたと言えよう。

したがって福沢は、朝鮮の「文明を助け進ること」、言い換えれば、朝鮮を「木造板屋」から「石造」に改築することについても、まず朝鮮の「ミツルカラッス」に相当する層に教育を行なってその智力を高めることから始める考え方に傾かざるを得なかったと考えられる。

そしてこのことは、朝鮮に西洋の文明を導入することであるから、必然的に、朝鮮を、従来その宗主国とされていた清国の文化圏から切り離し、西洋の文明を一步先に摂取した日本の文化圏に入れる方式をとることになった。

その現われとして福沢は、当時の朝鮮において両班以上が漢文（中国語文法の語順で書かれたものをそのまま上から下へ読みくだす）を常用する一方で、庶民はハングルのみを用いていたのに対して、日本語の漢字・仮名混じり文と類似した表記法はできないものかと考え、兪吉濬に命じて、自らの著書「（第一）文字の教」を朝鮮語に翻訳させ、漢字・ハングル混合表記法の可能性を追究している<sup>40</sup>。この表記法は、従来から漢字を用いてきた両班にとっては使いやすいものであっても、漢字を用いない庶民にとっては新たに漢字を学ぶ負担が生じることから、両班以上の支配階級向けのものであったと言える。しかも、のち井上角五郎らが朝鮮で新聞を発行する際に、福沢は彼への書簡の中で「朝鮮の假名文字〔ハングル〕にて近

淺なる理學醫學の道理を知らせ、又は滑稽洒落文杯も妙ならん。兎に角に假名は早々御用相成度、漢文のみにては區域狭くして埒明不申、實は假名文を以て朝鮮の舊主義をも一轉いたし度事共なり。日本にても古論を排したるは獨り通俗文の力とも可申、決して等閑に看るべからざるものに御座候<sup>41)</sup>と述べているところを見ると、福沢は兩班以上の支配階級の間で、漢文をすたれさせ、その代わりに日本語と似た、漢字と表音文字の混合文を根付かせることによって、朝鮮の支配層の「舊主義」すなわち衛正斥邪思想を一掃し、朝鮮を文化面での清国の影響から切り離して日本の影響下に入れようとしたものと考えられる。

さらに、のち1895(明治28)年に兪吉濬が著した「西遊見聞」は、福沢の「西洋事情」の影響が極めて濃いことから考えて、福沢が兪吉濬に「西洋事情」を読ませていたことは間違いない<sup>42)</sup>。

これらのことから、福沢が兪吉濬ら留学生に対して期待していたことは、少なくとも、朝鮮を清国文化圏から日本文化圏へ移す、朝鮮における文化面での指導者になることだったと言えよう。福沢にとっては、朝鮮を清国文化圏から日本文化圏へ移すことは、朝鮮を文明化することと同義であるから、彼は兪吉濬ら留学生に対して、文明化のリーダー、すなわち「ミツルカラッス」に相当する者の役割を果たさせようとしていたと言えるのである。

## 2. 一貫した福沢のナショナリズム

以上、福沢の初の朝鮮人留学生受入れに關することからを、福沢の文明論とのかかわりで考察したが、ここで、以上から知られる、日本と朝鮮の両国の文明化のプロセスについての福沢の考えをまとめてみたい。

日本では、福沢が慶応義塾で自ら、「ミツルカラッス」に相当する層を、文明化のリーダーとして育てあげ、この層の「一身独立」の氣風を「愚民」の間に浸透させることによって、全国に「一身独立」の氣風をみなぎらせることによって、最終的には、日本の「一国独立」を図ることを目的としていた。これは、「学問のすゝめ」「文明論之概略」の中を流れている考え方である。

一方、朝鮮に対しては、福沢は兪吉濬ら留学生に朝鮮を「文明化」するリーダーである「ミツルカラッス」に相当する者としての役割を果たさせようとし、漢字・ハングル混合表記法からわかるように、まず兩班以上の支配階級を日本の文明の影響下に入れようとしたのである。同時に「時事小言」の記述に見られるように、朝鮮国民の間に「文明化」が行き渡るのを待たずに、日本が武力を用いてでも朝鮮の「文明を助け進」めよと提唱した。そしてこれらは最終的には、朝鮮の「一国独立」ではなく、朝鮮を日本の傘下に入れることを目的としていた。

ところで、丸山真男は、福沢が「学問のすゝめ」「文明論之概略」を書いてから3~4年後に、彼の考え方に大きな変化があったとしている。すなわち、「学問のすゝめ」「文明論之概略」の時期には、「個人の自由獨立が他人の自由尊重を随伴するように、自國の獨立の主張は當然に他國のその尊重を意味<sup>43)</sup>」していたとし、「個人的自由と國民的獨立、國民的獨立と國際的平等は全く同じ原理で貫かれ、見事なバ

ランスを保つて<sup>44</sup>』た<sup>44</sup>と考える。ところがそれから3～4年後には、福沢は「露骨なマイト・イズ・ライ  
トの主張<sup>45</sup>」を掲げ、「國際社會における「道理」の支配の否定<sup>46</sup>」を行なうようになり、ここに「初期の樂  
観的な國際主義<sup>47</sup>」は全く変化してしまった——福沢が『時事小言』で對朝鮮強硬論を説いたのもこの時期  
にはいる——とするのが丸山の主張である。

ここで、さきに留学生に関することからを通して見た、朝鮮に対する福沢の働きかけ、および朝鮮論の  
展開は、丸山が述べているように、『学問のすゝめ』『文明論之概略』の内容と矛盾するかどうかを考え  
てみたい。確かに福沢は『学問のすゝめ』第3編では、「國は同等なる事」と題して、「自國の富強なる  
勢を以て貧弱なる國へ無理を加へんとするは、……國の權義〔權利〕において許す可らざることなり<sup>48</sup>」と  
述べている。しかし福沢はここでもあくまで、他國から日本國へのそのような「無理」を許さないために、  
「我日本國人も今より學問に志し氣力を慥にして先づ一身の獨立を謀り、隨て一國の富強を致<sup>49</sup>」そうと國  
民に呼びかけるのを目的としており、日本の「一國獨立」こそが福沢の望むところであった。彼は決して  
世界中の帝國主義に反対する論を展開したのではないのである。

したがって、『学問のすゝめ』『文明論之概略』が書かれたときにはまだ福沢の眼中になかった朝鮮の  
ことが、やがて『時事小言』を書くに至って彼の論点に上ってきたさい、かつて福沢が一般論として、國  
から國への「無理」を非難したことが、朝鮮問題の論調に何らの影響も及ぼさなかったのだと考えられる。

こう考えると、少なくとも留学生に対するかかわりを視野に入れて見る限りでは、朝鮮に対する福沢の  
働きかけの内容も、また朝鮮論の内容も、『学問のすゝめ』『文明論之概略』に見られる彼の考え方と矛  
盾しないと言える。すなわち、『学問のすゝめ』の中の、中心的な内容に関する限りでは、あくまで日本  
の「一國獨立」が至上課題であり、そこにはナショナリズムを読み取ることはできても、インターナシ  
ョナリズムははいる余地がなかったと言える（『文明論之概略』第10章の表現を借りれば、インターナシ  
ョナルなものは、当面は追求すべきものではなく、「第二步に遺して、他日為す所あらん<sup>50</sup>」とする「永遠微  
妙の奥蘊」「文明の本旨」であると言えよう）。したがって、福沢の考え方に丸山が述べているような変  
化があったわけではなく、一貫したナショナリズムのもとで、内外情勢を鋭くにらんだ福沢が、論説の強  
調点のみを変化させたのだと言える。

以上より、福沢の朝鮮人留学生に対するかかわりから見て、福沢の考えていた日本と朝鮮の「文明化」  
のプロセスの違いをさきのようにまとめることは可能であろう。つまり、彼の初の朝鮮人留学生受入れは、  
『学問のすゝめ』『文明論之概略』に見られる一貫したナショナリズムのもと、朝鮮を日本の傘下に入れ  
ることを展望して行なわれたものと結論づけることができるのである。

#### 〈注〉

- (1) 阿部洋「福澤諭吉と朝鮮留学生——1895年『朝鮮政府依託慶応義塾留学生』の場合を中心として」、『福澤諭吉  
年鑑』第2巻、福澤諭吉協会、1975年、62～63頁参照。

- (2) 岩波書店版『福澤諭吉全集』（以下、『諭吉全集』と略す）第20巻，1971年，148頁
- (3) 高崎宗司は、「福澤諭吉の朝鮮論と開化派」（『季刊三千里』第40号，三千里社，1984年11月，所収）の中で、私とはほぼ同じ箇所を引用して、「このころの福沢は、一言でいって朝鮮にはさほど関心をもっていなかった」（43頁）としている。

しかし、彼が朝鮮の国情について、学問も兵力も全く取るに足りないと言っているのは、朝鮮に対して関心がさほどなかったからではなく、ある程度関心をもって情報を得ていたからではないだろうか。実際、崔書勉、成沢勝訳「日本外務省御雇外国人『金鶴昇』について」（『韓』第7巻第6号，東京韓国研究院，1978年6月，所収）によると、日本政府は朝鮮からウラジオストックに難民として流れていた金鶴昇という者を外務省の外国雇員として採用し、朝鮮の国情を聴き出していたのであるから、日本の「一国独立」保持にとっての脅威のひとつであるロシアの動きに注意していた福沢が、何らかのルートでその内容の全部または一部を知っていた可能性はあるのである。

- (4) 『諭吉全集』第20巻，148～149頁
- (5) このように、列強の圧迫の中での日本の独立の保持をいわば「至上課題」とする福沢の論の立て方は、ほぼ同じ時期の彼の他の著書にも明確に示されている。『文明論之概略』中に、「先づ日本の國と日本の人民とを存してこそ、然る後に爰に文明の事をも語る可けれ。國なく人なければ之を日本の文明と云ふ可らず。是即ち余輩が理論の域を狭くして、單に自國の獨立を以て文明の目的と爲すの議論を唱る由縁なり」（『諭吉全集』第4巻，1959年，208頁）のほか，1878（明治11）年の『通俗民権論』には、「民権を伸ばして國の基を立て、官民諸共に獨立國の面目を張ること、至大至重の事なる歟、若し其事の重大なるを知らば、之を求るが爲には煩勞を憚る可らず」（『諭吉全集』第20巻，582頁），「所謂民権を張り之を國權に及ぼして、永く獨立國の體面を全ふせんとするには、……智力なかる可らず、財力なかる可らず、一身の品行私徳の力も大切なり、身體の健康腕力も亦等閑にす可らず」（同書，595頁），そしてこれと同時に出版された『通俗國權論』の緒言には、「内國に在て民権を主張するは、外國に対して國權を張らんが爲なり」（同書，603頁）とある。
- (6) 1866年，日本に明治維新が起こると，明治新政府は従来国交のあった朝鮮に対馬藩を通して日本の政權交代を通告した。この外交文書（書契）は天皇親政を伝えるものであったため，「皇」「勅」などの字を用いていた。ところが朝鮮は清國の屬國とされていたので，朝鮮では「皇」は清國の皇帝，「勅」はその命令を指すものと考えられており，大院君政權は，日本がこれらの文字を使用したのは従来之交隣關係を破棄して朝鮮の上に立とうとすることを示したものと見て，書契の受理を拒否した。73年に朝鮮の政權が大院君から閔氏に代わってからも朝鮮側の対応は変わらず，結局7年間膠着状態が続いた末，江華島事件を引き起こすことになった。（『朝鮮を知る事典』，平凡社，1986年，112～113頁による）
- (7) 以上，開化派の形成については，姜在彦『朝鮮の開化思想』，岩波書店，1980年，第4章第3節I参照。「変法的開化派」「改良的開化派」という名称も，姜在彦の用い方に従った。
- (8) 奥村円心「朝鮮國布教日誌」（柏原祐泉編『真宗史料集成』第11巻，同朋舎，1975年，所収）参照。
- (9) これについて日本人の書いたものとしては，前掲奥村「朝鮮國布教日誌」，及び『朝鮮開教五十年誌』大谷派本願

寺朝鮮開教監督部、1927年、第3編第1章がある。

- 00 寺田福寿（もと石亀福寿と名乗っていた）は、福沢のもとによく出入りして仏教に関して質問を受けたり、塾生の世話などをしていたほか、福沢と朝鮮開化派との間を取り持つなど、朝鮮問題に関して福沢を陰で支えた人物である。寺田についてはまだまとまった研究はないが、高柳正平「長沼遊弐に関する依頼状——新資料紹介」（『福澤手帖』第9号、福澤論吉協会、1976年3月、所収）、会田倉吉「石亀福寿の慶応義塾入学のこと」（『福澤手帖』第11号、1976年12月、所収）、小山伝三「金玉均を憶う——福沢諭吉、中村道太と豊橋」（『福澤論吉年鑑』第12号、1985年、所収）などを参照。

- 01) 石河幹明『福沢諭吉伝』第3巻、岩波書店、1932年、288頁

- 02) 金弘集一行は、8月31日に外務省に外務卿井上馨（1835～1915）を訪ねている。井上馨候伝記編纂会『世外井上公伝』（内外書籍、1934年）第3巻、442～443頁には、このときに井上が金弘集に対し、「……産業を起し貿易を盛んにすべきを説き、又兩國の親交には、相互に言語に通ずる者を多くする要があるから語學校を起すべきこと、留學生を送るべきこと、駐在使臣を派遣する要あること等を述べた」とあり、抽象的にはあっても明治政府内で朝鮮からの留學生受入れが考えられていたことがわかる。

一方、福沢はこの金弘集来日のときに、「八月十二日韓使入京」と題する漢詩を作っている。

異客相逢何足驚

今吾獨怪故吾情

西遊想起廿年夢

帶劍橫行倫敦城

（異客相逢ふも何ぞ驚くに足らん、今吾獨り怪しむ故吾の情、西遊想ひ起こす廿年の夢、帶劍して横行す倫敦＝ロンドン＝城）

これを見れば、福沢はかつて幕末の1862（文久2）年に幕府の使節団の一員としてヨーロッパに赴いたときの自分と金弘集一行をともに「異客」として重ね合わせ、昔の自分の思い（「故吾情」）を振り返っている。すなわちヨーロッパで文明に触れて、日本もこのような文明国でありたいものだと夢に見た20年前の自分の気持ちと、ロンドン市中を帯劍して横行した様子を回想しているのである。

さらに金弘集一行の来日目的に開港延期の申し入れが含まれていることが、福沢の参加した遣欧使節と全く同じであったことを考えると、金弘集一行の姿は、福沢にとっては、20年前の自分の姿を髣髴とさせるものがあつたのであろう。

なおこの漢詩は、『諭吉全集』第20巻、440頁所収。前掲石河『福沢諭吉伝』第3巻289頁では、同じ詩を翌年の紳士遊覧団来日のときのものとしているが、『諭吉全集』が年代をはっきりと示していることから見ると、石河の方は誤りではないかと思われる。

- 03) 後藤は、征韓論をめぐる論争に敗れて下野してのち、長崎高島炭鉱の経営に失敗して自宅に引きこもっていた。

- 04) 井上角五郎『福沢先生の朝鮮御経営と現代朝鮮の文化とに就いて』、私家版、1934年、慶応義塾図書館蔵、3頁

- 05) しかし李東仁は、紳士遊覧団の渡日前に行方不明となってしまう。その理由は現在でも謎であるが、これについて

李光麟は、外交政策に関する開化派内の意見対立その他により、金弘集が李東仁を謀殺したのではないかと述べている（渡部学訳「開化僧李東仁——韓国開化運動と仏教思想」、『韓』第2号、1972年2月、所収）。なお、前掲石河『福沢諭吉伝』第3巻288頁では、李東仁が行方不明になったのを紳士遊覧団帰国後としているが、これは訂正されるべきであろう。

なお、紳士遊覧団については、鄭玉子、阿部洋訳「紳士遊覧団考」（『韓』第3巻第5号、1974年5月、所収）が詳しい。

06) 但しこの2名は正式の慶応義塾生としての扱いは受けなかったとみえて、『慶応義塾入社帳』には記載されていない。

07) 尹致昊は、1883年にアメリカ公使館通訳となって帰国する。1884（明治17）年に変法的開化派が起こした甲申政変には参加しなかったが、やがて朝鮮政界で活躍し、独立協会会長として国政改革運動を指導。のち秘密結社新民会の会長として、日本の朝鮮支配に反対して愛国啓蒙運動の先頭に立つ。日韓併合後、朝鮮総督府に投獄され、出獄後も教育家・キリスト教界指導者として活躍したが、日本統治末期には積極的対日協力者となり、解放後その罪を非難され自殺した。（前掲『朝鮮を知る事典』、115頁による）

08) 『諭吉全集』第17巻、1961年、454頁

09) 福沢は『時事小言』を遅くとも1881（明治14）年3月には一部分書いており（彼はこの年3月10日付の大隈重信宛書簡で、『時事小言』の原稿の一部を示している。『諭吉全集』第17巻、442～443頁参照）、同年7月に脱稿している。

20) 『諭吉全集』第5巻、1959年、167頁

21) 同書、177頁

22) 同書、187頁

23) 同書、同頁

24) 坂野潤治『明治・思想の実像』（『叢書・身体と思想』第8巻）創文社、1977年、第1章第1節参照。

25) 『福沢諭吉選集』第7巻、岩波書店、1981年、所収の坂野潤治「解説」335頁参照。

26) 前掲坂野『明治・思想の実像』32頁以下参照。

27) 前掲『福沢諭吉選集』第7巻、337頁

28) 国会期成同盟会の勢力に対抗して、政府の立場からの国会開設を成功させようとしていた伊藤博文・大隈重信・井上馨は、1880（明治13）年暮から、福沢に政府の機関紙発行を依頼していた。ところが「明治14年の政変」によって大隈は免官され、機関紙のことも白紙撤回された。その後福沢は自らの手による世論形成を決意し、1882（明治15）年3月1日、民間紙『時事新報』発行に踏み切ったのである。以後福沢は、この『時事新報』を舞台に、朝鮮に関するものを含めて数多くの論説を展開していく。

29) 『諭吉全集』第8巻、1970年、29頁

30) 同書、30頁

31) 『諭吉全集』第3巻、1969年、30頁

- 32) 同書, 同頁
- 33) 『論吉全集』第4巻, 41頁
- 34) 福沢は、『文明論之概略』の中で、文明の根本的な推進力を指すのに「智力」「智徳」の両方の表現を用いている。この「智徳」については、『文明論之概略』卷之三、第6章「智徳の弁」に説明がある。それによると、「智徳」とは「智恵（インテレクト）」と「徳義（モラル）」を指し、「徳義は智恵の働に従て其領分を弘め其光を發するものなり」とあることから、本文中に示したような、文明の推進力を「智徳」と表現してある箇所であっても、そのさらに根本的なものは「智恵」「智力」と解するべきである。
- 35) 『論吉全集』第3巻, 49～50頁
- 36) 同書, 52～53頁
- 37) 同書, 53頁
- 38) 同書, 60頁
- 39) 同書, 61～62頁
- 40) 前掲石河『福沢論吉伝』第3巻, 298頁, 及び渡部学「第4回金玉均研究会報告」（葛田正文の講演をまとめたもの。『韓』第2巻第5号, 1973年5月, 108頁）参照。
- 41) 『論吉全集』第17巻, 616頁
- 42) 『西遊見聞』の評価について、金泰俊は、「福沢論吉の『西洋事情』を紹介するにとどまった」（崔吉城訳「『西遊見聞』と『西洋事情』—比較文化的研究のための問題提起」, 『韓』第6巻第5号, 1977年5月, 122頁）と述べている。一方、姜在彦は、「伝統的『東道』の立場をくずすことなく『西器』に学ぶことを主張しているところが、儒教を野蛮とみる福沢の脱亜思想と大いに異なるところである」（前掲姜在彦『朝鮮の開化思想』265頁）と、兪吉濬の思想の独自性を強調している。
- 43) 『福沢論吉選集』第4巻, 岩波書店, 1952年, 所収の丸山真男「解題」414頁
- 44) 同書, 415頁
- 45) 同書, 同頁
- 46) 同書, 同頁
- 47) 同書, 416頁
- 48) 『論吉全集』第3巻, 42頁
- 49) 同書, 43頁
- 50) 『論吉全集』第4巻, 209頁

(大学院前期博士課程)